

平成20年度の学会賞の授与について

第27回日本自然災害学会学術講演会が、平成20年9月25～26日に、福岡市に於いて開催された。9月26日（金）に開かれた総会の中で、学会賞の授賞式が行われた。日本自然災害学会の学会賞として、功績賞と学術賞が設けられている。

学術賞は加藤尚子氏（(独)国立環境研究所）、立川康人氏（京都大学 准教授）に授与された。功績賞・国際賞に該当はなかった。



学術賞

受賞者：(独)国立環境研究所 加藤 尚子 氏
研究題目：昭和13年「阪神大水害」における旧本山村（現神戸市東灘区）の災害対応と復旧支援
掲載誌：「自然災害科学」, Vol. 26, No. 3, 2007, pp. 291-305

受賞理由

2008年7月神戸都賀川の水害は、都市や社会の変化とともに進化する神戸の水害リスクを再認識させた。当地方は70年前に阪神大水害を経験している。候補論文は1938年阪神水害の被災地が残した『本山村水禍録』に着目し旧本山村の被災状況から対応に至るまで過去の活動を分かりやすく整理し、丹念に記録にしたものである。現代における対応課題を考える上でも基礎資料となるもので、近代災害史研究としても価値がある。よって学会賞に値すると判断する。

受賞コメント

このたび平成20年度日本自然災害学会・学会賞の学術賞を賜りましたこと、身に余る光栄と心よりお礼申し上げます。学会員の皆さま、審査委員の皆さま、諸先生方はじめ多大なるお力添えを下さいました皆さまがた、そして勤務時間外とはいえ本務としない研究にエネルギーを費やしていることを知りつつも暖かく見守って下さる、私の勤務先である独立行政法人国立環境研究所の皆さまがたへ、この場をお借りして感謝の意をささげます。

この受賞の一報をいただきましたときには、

驚きとともに正直戸惑いを覚えました。戸惑いの主な理由は、この受賞論文は私が初めて執筆した「災害史」についての論文であり、これをもってようやく博士論文への緒に就いたというところだからです。

私の経歴は若干異色でございまして、山口大学農学部で農業経済学を専攻したのち1988年に出版社へ就職し、約10年の勤務を経て1999年に東京大学大学院農学生命科学研究科修士課程に社会人入学いたしました。農業・資源経済学専攻の農業史研究室に所属し、当初は「中世イングランド農書」に関する研究を行い、修士の学位を得てから博士課程に進みましてからもいくつか口頭発表や学術論文に取り組んでおりました。しかし、自分の仮説を実証するために十分な語学力を私は有しておらず、それらを改めて修得するには年齢を重ねすぎているという現実と直面いたしました。

この方向転換やむなしという状況下にありました頃、偶然、独立行政法人防災科学技術研究所の資料室で働く機会を得ました。蔵書の整理や災害関連資料の蒐集といった仕事するうちに、意外にも歴史学をバックグラウンドに持つ研究者による災害史研究が非常に稀

であることを知りました。論文でも触れましたが、阪神大水害の発災後1年から1年半の間に、県・市・区・村・町内会というサイズの異なる7つのローカル・ガバナンスによって災害誌が出版され、現在でも手にとって読むことができます。概ね同じ立地条件・同じ時代背景を持つ複数の地域社会が同質のインパクトを同時に受けたとき各々いかに振る舞ったのか、興味はつきません。「面白そうなネタなのに日本史の人はなぜやらないのでしょうか」と指導教官に話しましたところ、「面白いと思うなら貴方がやったら？」と背中を押していただ

き、それではと、できることから少しずつ取り組みはじめ、ようやくまとめあげたのがこの受賞論文でございます。

この度の受賞は私にとって非常な喜びでありますと同時に、今後の私への皆さま方からの暖かいエールとして有難く頂戴いたします。これから後も更に身を引き締めて励みたく存じます。

最後に、仕事と研究に追われ、ささくれ立った心で帰宅する私に、ホッととろけるような安らぎの時を与えてくれる2匹の愛猫に感謝し、受賞の挨拶とさせていただきます。



学術賞

受賞者 : 京都大学 准教授 立川 康人 氏
 研究題目 : 分布流出予測モデルによる実時間流出予測システムの開発に関する研究
 掲載誌 : 「自然災害科学」 Vol. 26, No. 2, 2007, pp. 189-201
 第25回日本自然災害学会学術講演会講演概要集 II-2-4, pp. 81-81, 2007

受賞理由

中・小河川を含めた水系一体を対象として、実時間の広域分布型流出予測モデルを予測エンジンとする高度水防災情報提供システムを開発した。従来は難しかった、流域における有効で高度な洪水予測情報を得ることにつながる成果である。具体的に淀川水系を例にシステム構築を行って、その実用性を示している。よって本研究は学会賞に値すると判断する。

受賞コメント

平成20年度の日本自然災害学会学術賞を受賞することができましたこと、大変光栄に存じます。学会および会員の皆様にご心より感謝を申し上げます。

受賞の対象となりました研究は、水系全体を対象とする詳細な分布型流出モデルを構成し、それをリアルタイムで動作させて予測結

果を動的に得る一連の流出予測システムの開発を内容としています。実際に淀川流域(枚方上流域, 7,281 km²)を対象とした予測システムを構成し、6時間先までの流量予測値をインターネットを通して閲覧することを可能としました (<http://yodogawa.kuciv.kyoto-u.ac.jp/>)。この予測システムは、淀川流域のほぼ任意河道地点での河川流量に加えてダム流入量、放流量やダム水位も予測対象とした総合的な予測システムとし、中小河川など水文観測が十分でない地域への洪水予測情報の提供、水工施設の高度運用や弾力的運用のための高度な洪水予測情報の提供を実現するための先端的なプロトタイプを構築することを目指しました。

計画規模に匹敵する、あるいはそれを上回る極めて大きな洪水がしばしば発生し、特に府県管理の中小河川流域において予測の重要

性が高まっています。ただし、中小河川流域では水文観測データの蓄積が不十分な場合が多く、実用に耐えるような流出モデルを構築することは容易ではありません。この困難を克服するためには、特定の中小河川を対象とするのではなく、水系全体を対象とする詳細な空間分解能を有する実時間流出予測システムを構築し、観測水位・流量が存在する複数観測地点で観測値とモデル計算値との適合性を確認して、この予測システムを用いて観測値の存在しない任意地点の予測値を得ることが合理的と考えます。

流出システムの予測結果の公開が、予測精度向上のための新たな研究・技術開発や共同研究に結びついていくものと考えています。実

際、我々も日々、予測計算結果を確認することによって、予測精度向上のためのヒントを得ています。

なお、本研究は京都大学防災研究所の寶馨教授、佐山敬洋助教との共同研究によって実現したものです。淀川流域のリアルタイム水文・気象データの取得につきましては、京都大学防災研究所の馬場助教、技術室の松浦様、山崎様、(財)日本気象協会の山路様、道広様に大変お世話になりました。また、本研究の推進におきましては、国土交通省建設技術研究開発助成制度（平成17-18年度）を始めとする資金的な援助をいただきました。ここに感謝を申し上げます。